

終末期にある患者を受け持った看護学生の学習成果

沼 沢 さとみ¹⁾・小 林 美名子¹⁾・藤 田 あけみ²⁾
井 上 京 子¹⁾・齋 藤 亮 子¹⁾・瀬 戸 正 子¹⁾

Nursing student's learning achievements in the practice of terminal care

Satomi NUMAZAWA¹⁾, Minako KOBAYASHI¹⁾, Akemi FUJITA²⁾,
Kyoko INOUE¹⁾, Ryoko SAITO¹⁾, Masako SETO¹⁾

Abstract : Eleven 3rd year nursing students in a three year nursing course were studied to assess their learning achievements when practicing their skills taking care of terminally ill patients. The data was collected from their reports which they had written as part of their assignments during their practice sessions. The reports were then analyzed using the Berelson's Content analysis method. 19 categories were derived. Of these, the top 5 categories were ; 1) perceiving the difficulty associated with the provision of care ; 2) understanding the nursing skills necessary for caring for terminally ill patients ; 3) understanding the care needed to ensure the dignity of patients' as well as their families' will in accordance with their wishes ; 4) understanding patients from multiple perspectives and 5) acknowledging and accepting their own emotional response towards the terminal patients and their death. These categories are highly suggestive that the students gained in 6 skill and practice areas namely ; how to adjust and adapt their skills to meet individual needs ; reassessment of the nature of nursing and its function in taking care of patients ; orienting themselves by establishing their self-concept as human beings and as nursing students ; understanding the need to acquire nursing practice skills as essential to developing their ability to serve ; perceiving the interplay between the difficulty and the satisfaction related to the practice of nursing and finally, gaining a better understanding of the role of the nursing profession in terminal care nursing.

Key Words : nursing students, terminal care, nursing education, clinical practice

はじめに

臨地実習は、看護基礎教育課程において重要な位置を占め、保健師助産師看護師学校養成所指定規則では、成人および老人看護学の実習は臨地実

習の60%以上の時間数を占めている。また、看護師教育の基本的考え方のひとつとして、健康の保持増進、疾病予防と治療、リハビリテーション、ターミナルケア等、対象の健康状態に応じた看護を実践するための基礎的能力を養う、ということ

1) 山形県立保健医療大学看護学科
〒990-2212 山形市上柳 260
Department of Nursing, Yamagata Prefectural University
of Health Science
260 Kamiyanagi, Yamagata 990-2212, Japan

2) 青森県立保健大学看護学科
〒030-8505 青森市大字浜館字間瀬 58-1
Department of Nursing, Aomori University of Health and
Welfare
58-1 Hamadate Mase, Aomori 030-8505, Japan

を示している。そのため、看護の実践能力は臨地実習において培われるといっても過言ではない。

終末期にある患者の看護実習においては、例えば患者を全人的に理解する、あるいは看護の必要性が理解できるといった学習目標は抽象度が高く、学生の価値観や態度を獲得するための情意領域の学習といえる。また、患者の状態は変化しやすく予測が困難であり、学生の学習活動もこれに影響を受けやすい状況におかれる。本研究の対象とした終末期看護の実習は、成人看護学の実習から独立しておらず、時に慢性期の成人看護学実習として行われることもある。このような点からも学生自身が実習の目標や内容を十分に理解して実習を行っているとはいえない。教員が、終末期看護の実習中における学生の学習活動を観察し、その学習成果を具体的に把握することは限界があり容易なことではない。

ターミナルケアの教育に関する先行研究では、看護学生の死生観や、死に対する意識や態度、あるいは終末期患者を受け持った学生への教員の関わりについて報告されている^{1~6)}。臨地実習に関しては、学びや学習成果あるいは学習経験などについて、帰納的手法を用いた研究がいくつか報告されている^{7~12)}。このうち終末期患者の看護実習を対象にした研究^{13, 14, 15)}も散見されるが、いずれの研究も「学び」あるいは「学習」という考え方が一様ではない。また、分析の対象となるデータや分析に用いる手法も異なるため、文献による比較検討が難しい。

そこで、終末期の患者を受け持ちとした実習の目標や内容・方法を検討し、効果的な教授活動の展開を考えるための基礎資料とするために、本研究では、学生の実習記録をデータとし、ベレルソン¹⁶⁾の内容分析の手法によって終末期患者を受け持った学生の学習成果を明らかにして、その特徴を考察することを目的とした。

研究方法

1. 研究対象

3年課程短期大学看護学科の3年生で、平成12年5月から11月までの臨地実習の期間中、成人老人看護実習において終末期にある患者を受け持った学生11名を対象とした。対象の年齢は20歳から22歳であった。そのうち終末期の患者を受け

持った実習は、成人老人看護実習のうちの慢性期実習または、その他の実習（他の実習で経験できなかった疾患や健康レベルや年代の患者を選択して行われる実習）である。慢性期実習は成人老人看護実習10単位のうち3単位135時間で、実習期間は3週間であった。その他の実習は2単位90時間で、実習期間は2週間であった。対象学生の実習時期は他の領域の実習との関連などにより一定ではない。3年次のすべての実習終了後、直接学生に対して研究の目的や意義、倫理的配慮について説明し文書により同意を得た。学生が受け持った終末期の患者は、すべてががん患者で、根治的治療が行われていない患者である。

2. データ収集

学生は終末期の患者を受け持った慢性期またはその他の実習後に、成人老人看護実習の共通の他の実習記録とともに「学んだこと、感じたこと」を記載する。記録は実習終了の翌週に提出され、このうち、「学んだこと、感じたこと」の自由記述式の項目をデータとした。

3. データの分析

データの分析はベレルソン¹⁶⁾の内容分析の手法を用いた。

記録単位は、終末期患者を受け持った実習で「学んだこと、感じたこと」が記述されている主語と述語からなる1文章とした。文脈単位は、記述内容の全体の文脈が理解しやすい学生1名分の記録全体とした。

次いで、分析対象とする記述を意味内容の類似性に従い分類し、その分類を忠実に反映したカテゴリネームをつけ、分類された記録単位数を算出した。分類とカテゴリネームについては研究者間で繰り返し検討した。カテゴリの信頼性は、スコットの式¹⁷⁾に基づき一致率を算出し検討した。

結 果

記述内容は、150の記録単位に分割された。これらのうち、「終末期患者の看護実習で学んだこと、感じたこと」に関して記述内容が明確な78記録単位を分析した。その結果、19のカテゴリが形成された(表)。カテゴリへの分類の一致率は84.8%であった。抽出された記録単位数の多いカテゴリから順に、その内容を以下に述べる。

表 終末期にある患者を受け持った学生の学習成果

カテゴリー		記録単位数	%
1. ケア提供に伴う困難さの知覚	患者への接し方・ケア提供についての不安・迷い・困惑	12	15.4
	ケア遂行の困難さ		
2. 終末期患者の看護に必要な看護技術の理解	コミュニケーションスキルの適切な活用の方法	10	12.8
	効果的なペインコントロールの実施		
	化学療法時の副作用の理解とその対処方法		
3. 個人や家族の意思・希望を尊重したケアの提供の理解		7	8.9
4. 多角的な視点からの患者の理解	患者の人物像（背景・家庭環境・考え方・人格・望み）の理解	6	7.7
	患者の経過からの病状の理解		
	意識が不明瞭な患者の心中の理解		
5. 終末期患者や死に対する自己の情動反応の知覚		6	7.7
6. ケア提供に伴う知識・技術の不足の自覚	自己の知識・技術の不足	5	6.4
	自己のケアの効果についての疑問		
7. 終末期を特別視せず患者を最後まで人間として尊重する態度の理解		5	6.4
8. 患者に対する家族の思いや影響力の理解	患者のそばにいたい家族の気持ちの理解	4	5.1
	ともに闘病してきた家族が患者の死を受容する過程の理解		
	患者の反応を引き出し希望を与える家族の力の理解		
9. ケア提供者としての役割の自覚	ケア提供の必要性の自覚	4	5.1
	学生の立場を踏まえたケア提供の自覚		
10. 終末期患者の死の受容過程・治療・ケアの多様性とその理解		3	3.8
11. 円滑なケア提供による満足感		3	3.8
12. 「する」ことだけがケアではないという気づき		2	2.6
13. 終末期患者に「寄り添う」「共感する」ことの大切さの理解		2	2.6
14. 臨死患者が示す「生きる力」「生き方」への敬嘆		2	2.6
15. 自己の生き方の問い直し		2	2.6
16. 終末期看護の困難さの自覚		2	2.6
17. 患者の反応からケアの効果を評価する大切さの理解		1	1.3
18. 終末期ケアの視点の「死」から「生」への転換		1	1.3
19. 自己の看護観の再確認		1	1.3

1. ケア提供に伴う困難さの自覚

カテゴリーは、12 記録単位から形成された。初めからどのように接すればよいだろうかととても不安に思い戸惑いながらも関わった、何を話したらいいのかわからなくて戸惑った、私にできることはないのだろうか悩んだ、自分は看護ができたとは胸を張って言えないなどであった。

2. 終末期患者の看護において必要な看護技術の理解

カテゴリーは、10 記録単位から形成された。抗がん剤の副作用をよく理解し対応していかなければならない、適切な言葉を用いてコミュニケーションをはかっていかなければならない、痛みを伴うことなく安楽でいられることがよいなどであった。

3. 個人や家族の意思・希望を尊重したケア提供の理解

カテゴリーは、7 記録単位から形成された。患者の意思を尊重することも考慮に入れながらケア方針を考えていきたい、患者のペースを理解して計画していく看護が大切、家族や患者の希望を大切にし個人にあわせて考えていかなければならない、その人らしく残りの人生を過ごすことができるよう援助していかなければならないなどであった。

4. 多角的な視点からの患者の理解

カテゴリーは、6 記録単位から形成された。患者はどのような人物で何を望んでいるのかをよく理解しなればならない、経過を観察することで患者をよく理解することができる、意識がはっきりしない患者でも心の中ではいろんなことを考えて

いると思うなどであった。

5. 終末期患者や死に対する自己の情動反応の知覚

カテゴリは、6 記録単位から形成された。これからの人生があったはずと考えると胸が痛んだ、接するうちに自分の中の死に対して恐怖感のようなものがでてきたなどであった。

6. ケア提供に伴う知識・技術の不足の自覚

カテゴリは、5 記録単位から形成された。コミュニケーションを通して患者を理解し信頼関係を築いていくことはまだ技術が足りないのでこれからの課題だ、評価することに欠けていた、患者の抱える精神的な不安に気づくのが遅かったことが課題として残った、自分のしているケアが本当に患者にとって必要なことだろうかと考えたなどであった。

7. 終末期患者を特別視せず最後まで人間として尊重する態度の理解

カテゴリは、5 記録単位から形成された。告知していないからといって特別に変える必要はない、ターミナルということを意識しすぎずに他の患者と同じように接することも必要、最後の最後まで1人の人間として尊重し接することが大切であるなどであった。

8. 患者に対する家族の患者への思いや影響力の理解

カテゴリは、4 記録単位から形成された。家族の患者のそばにいたい気持ちを理解することができた、患者と共に闘病してきた家族には経過も結末も受け止めることができていた、患者に希望を与える力を持っているのは家族だった、患者は家族が来ると表情が変わることから存在の大きさを知ったであった。

9. ケア提供者としての役割の自覚

カテゴリは、4 記録単位から形成された。患者の訴えを少しでも聞いてあげたい、学生だからできることもあると思うのもっとコミュニケーションを取って患者と関わっていききたいなどであった。

10. 終末期患者の死の受容過程・治療・ケアの多様性とその理解

カテゴリは、3 記録単位から形成された。ターミナルケアといっても告知するしないなどケースによって様々である、患者によって受け止め方はそれぞれ違う、誰しもが1つの受容過程をたどる

のではないであった。

11. 円滑なケア提供による満足感

カテゴリは、3 記録単位から形成された。自分は患者と家族と少しずつ心を開いて話せるようになり達成感を得られた、家族が困っていることを援助し患者が話していることを聞くことで接するのが楽しくなった、ケアを通して患者の反応が見られた時はよかったであった。

12. 「する」ことだけがケアではないという気づき

カテゴリは、2 記録単位から形成された。すべてしてあげることが必ずしもよい看護ではない、何かすることだけが看護じゃないであった。

13. 終末期患者に「寄り添う」「共感する」ことの大切さの理解

カテゴリは、2 記録単位から形成された。「寄り添っていく」ということも大切だ、患者の気持ちを受けとめ共に共感していくことが大切であるであった。

14. 臨死患者が示す「生きる力」「生き方」への敬嘆

カテゴリは、2 記録単位から形成された。生きる力を見せつけられた、ひどい疼痛や痺れと闘いながら何かを残そうとしていたであった。

15. 自己の生き方の問い直し

このカテゴリは、2 記録単位から形成された。私はこの20年間ちゃんと生きてきていたのだろうか、患者を通して自分自身を見つめる機会がえられたであった。

16. 終末期看護の困難さの自覚

カテゴリは、2 記録単位から形成された。看護婦の仕事は難しいと思った、ターミナル期の看護は奥が深くて難しいと思ったであった。

17. 患者の反応からケアの効果を評価する大切さの理解

カテゴリは、1 記録単位から形成された。「患者に効果が得られたことはよかったと評価し今後にかかすことが大切」であった。

18. 終末期ケアの視点の「死」から「生」への転換

カテゴリは、1 記録単位から形成された。「死のことを考えるのではなく生きている現在の自分のことに考えを移してあげることも必要」であった。

19. 自己の看護観の再確認

カテゴリは、1 記録単位から形成された。「私自身のあいまいな看護観を見直すきっかけになっ

た」であった。

考 察

形成された19カテゴリのカテゴリ間に関連する学習活動に着目して検討し、終末期にある患者を受け持った看護学生の学習成果の特徴について考察する。

1. 個別性のある看護の理解

カテゴリ<3. 個人や家族の意思・希望を尊重したケア提供の理解>, <4. 多角的な視点からの患者の理解>, <8. 患者に対する家族の思いや影響力の理解>, <17. 患者の反応からケアの効果を評価する大切さの理解>は、学生が看護学実習で終末期の患者を受け持って獲得した学習成果を明らかにした。

学生は、単に終末期の患者の身体的な側面だけを理解するのではなく、患者の心理・社会的側面にも視点を当て、より多くの情報から理解しようとしている。特に、患者や家族の意思や希望がどうであるかを理解しようとし、それを重要視していることがうかがえる。また、終末期の患者を受け持った学生は、患者だけではなく家族との関わりを多く体験する。その中で、家族の患者に対する思いを知り、患者にとっての家族の存在の大きさを実感していることを示している。そして学生は、ケアを提供したことによる患者の反応に注目し、そこからケアの効果を評価する必要があることの重要性を見出している。これらのことは終末期の患者を全人的に理解してケアを提供し、その評価をするという看護実践そのものであり、受け持った一人の患者の看護過程を通して個別性を捉えて看護していくことを学習している。よってカテゴリ3・4・8・17は、学生が終末期患者の状況に応じた看護を実践するという学習活動を通して、「個別性のある看護の理解」という特徴をもつ学習成果を獲得したことを示している。

2. 終末期看護の専門性の理解

カテゴリ<2. 終末期患者の看護に必要な看護技術の理解>, <7. 終末期を特別視せず患者を最後まで人間として尊重する態度の理解>, <10. 終末期患者の死の受容過程・治療・ケアの多様性とその理解>, <13. 終末期患者に「寄り添う」「共感する」ことの大切さの理解>, <14. 臨死患者が示す「生きる力」「生き方」への敬嘆>

<18. 終末期ケアの視点の「死」から「生」への転換>は、学生が看護学実習で終末期の患者を受け持って獲得した学習成果を明らかにした。

学生が終末期にあるがん患者を受け持った場合、緩和ケアの考え方を基本とし実習を考えることが必要と思われる。WHO¹⁸⁾は、緩和ケアの教育の課題として、がん、痛み、死への過程、死などに対してとる個人の態度、重症患者や死が差し迫った患者の心理社会的ならびに霊的ニーズ、有効なコミュニケーションの原則、痛みをはじめとする諸症状の診断と治療などを挙げている。また、松島¹⁹⁾は、緩和ケア教育のテーマとして、症状マネジメント、心理・社会・霊的ケア、自己理解・他者理解、コミュニケーションスキルなどを挙げている。本研究が示したカテゴリは、これらの教育の課題に含まれており、終末期看護の専門性を示しているものでもある。よってカテゴリ2・7・10・13・14・18は、学生が終末期看護に必要な知識・技術・態度を修得する学習活動を通して、「終末期看護の専門性の理解」という特徴をもつ学習成果を獲得していることを示している。

3. 看護の本質と機能の再考

カテゴリ<9. ケア提供者としての役割の自覚>, <12. 「する」ことだけがケアではないという気づき>, <19. 自己の看護観の再確認>は、学生が看護学実習で終末期の患者を受け持って獲得した学習成果を明らかにした。

学生は受け持った患者に対して必要なケアを考え、そのケアを実施しようとする中で、学生自身が、患者に対してケアを提供するという看護者としての役割を強く意識していることを示している。また、学生はケア提供者として、実際の行為を伴う身体的ケアなどをケアと捉えがちだが、そうではないケアの方法もあるということに気づいたということを示している。「看護に対する一般社会における看護の価値づけを再吟味し、それを『業』としていく専門職として再評価し価値づけることも、看護学実習においてこそ可能な学習である²⁰⁾」といわれており、学生は実践を通して、自分が行ったケアを振り返ってその意味について考え、それまでの看護に対する価値観を考え直してみようという学習をしている。よって、カテゴリ9・12・19は、学生が看護職としての役割を自覚し、自己の看護観を改めて考えるという学習を通して、

「看護の本質と機能の再考」という学習成果を獲得していることを示している。

4. 人間として看護学生としての自己概念確立への志向

カテゴリ<5. 終末期患者や死に対する自己の情動反応の知覚>, <15. 自己の生き方の問い直し>は, 学生が看護学実習で終末期の患者を受け持って獲得した学習成果を明らかにした。

看護学生の死に対する感情に関する調査では, 死を知ったことによる感情は, 恐怖や衝撃などの否定的な感情が多数表現されている。また, 否定的感情と同時に肯定的感情も見られたと報告されている²⁾。研究手法が異なるものの, これは本研究の結果を支持するものと考えられる。そして, 終末期の看護に携わる者は, 自分自身の情動を理解し, それらを認める必要²¹⁾があり, 「現実には, 死を絶対に避けることができないという病態が存在する。したがって, 医療者は, 特にその限界に対処できる死生観を修得しておく必要がある²²⁾」ともいわれている。このようなことから本研究の結果は, 学生が, 実習の中で患者の死にかかわる体験をし, 自分の中にある様々な感情を知り, 自分自身の生活や人生を改めて考えることによって, さらには生とは何か, 死とは何かを思考し自分なりの死生観を形成していこうとしていると考えられる。青年期は, 自分が生きることを, 自覚的・反省的に吟味できるようになる時期である²³⁾といわれ, また, 自分自身の行動や思考を手がかりに自己を捉える傾向と同時に, 他者を手がかりとして自己概念を作りあげてゆく傾向も顕著である²⁴⁾。また, 「自分とは何かを発見する痛みを伴う発達課題の達成に挑戦している²⁵⁾」とも言える。したがって, これらの学習は, 青年期にある学生が, 自己概念を作り上げるという, 自分自身の発達課題達成のための学習でもある。よってカテゴリ5・15は, 学生が終末期患者との関わりを通して自己の生き方や人間の死に向かい合い, 自己を洞察するという学習活動を通して, 「人間として看護学生としての自己概念確立への志向」という学習成果を獲得していることを示している。

5. 看護実践能力の修得状況の把握

カテゴリ<6. ケア提供に伴う知識・技術の不足の自覚>は, 学生が看護学実習で終末期の患者を受け持って獲得した学習成果を明らかにした。

終末期の患者は身体状態が悪く, 心理的にも不安定なことが多いため, ケア提供に対する効果の有無を判断することも難しく, 学生自身の自己の知識・技術の不足や未熟さを感じる結果になったと考えられる。「自分で自分の学業, 行動, 性格, 態度等を評価し, それによって得た情報(知見)によって自分を確認し, 自分の行動を改善・調整するというこの一連の行動²⁶⁾」を自己評価といい, 知識・技術の不足を自覚するということは, 自分の行動や態度を確認するという行動であり, 自己評価の行動の一部ともいえる。「自己評価」は, 基本的にあらゆる教育の要²⁷⁾であり, 田島²⁸⁾は, 学習の過程には, 自己の学習状況を振り返る過程を作ることを配慮する必要について述べている。また, 梶田²⁹⁾は, 自己評価は, 自分自身の振り返り, 独善性の克服, 分析的な自己理解, 効力感・自身へのきっかけという働きをもつといっている。知識・技術の不足や未熟さは, 初学者である学生にとっては終末期以外の実習でも感じることであり, 繰り返し自己評価することで, 学習の継続につながったり学習意欲をたかめたりすることが期待される。よって, カテゴリ6は, 学生が看護実践に必要な知識・技術・態度を自己評価するという学習活動を通して, 「看護実践能力の修得状況の把握」という学習成果を獲得していることを示している。

6. 看護実践に伴う満足感と困難さの知覚

カテゴリ<1. ケア提供に伴う困難さの知覚>, <11. 円滑なケア提供による満足感>, <16. 終末期看護の困難さの自覚>は, 学生が看護学実習で終末期の患者を受け持って獲得した学習成果を明らかにした。

学生は, 終末期の患者を前にしてケアを行ってよいか, どのようにすればよいか不安や戸惑いを実習終了まで繰り返し感じ, さらには看護そのものを難しいと感じている。一方で, 学生と患者との関係が良好で, ケアに対する患者の反応によってその効果があったといえるときは, 学生自身が満足感を感じている。海野ら³⁰⁾は, 看護学実習における学生のケア行動を説明する概念のひとつとして, ケアの効果確認によるケアへの意欲触発と喪失, ケア提供の混乱と中止をあげている。実践に伴って満足感や困難さを知覚することで, 看護に対する興味や関心もより強くなることが期待さ

れる。よって, カテゴリ 1・11・16 は, 学生が看護実践を円滑に進めたり難渋したりするという学習活動を通して, 「看護実践に伴う満足感と困難さの知覚」という学習成果を獲得していることを示している。

これらの特徴は, 学生が看護学実習において終末期の患者を受け持ち, 「個別性のある看護の理解」「看護の本質と機能の再考」「人間として看護学生としての自己概念確立への志向」「看護実践能力の修得状況の把握」「看護実践に伴う満足感と困難さの知覚」というどの実習領域にも共通する成果を獲得していることを示した。またこれらの成果獲得とともに, 「終末期看護の専門性の理解」という終末期看護学実習に特有の成果も獲得していることも示した。

教員は, 終末期の患者を受け持った実習での 6 つの学習成果と, それまでの実習目標を照合し, 終末期看護の専門性を学ぶ実習, さらに看護を学ぶ実習としての学習内容の検討と方法の選択, 学習者の学習の継続や意欲向上や発達課題達成のための学習内容や方法の検討が必要である。また, これら 6 つの学習成果の特徴は, 教員が教授活動を自己評価するために活用可能である。しかし, 対象者が終末期の患者を受け持った学生 11 名であり, 収集したデータ数は十分とは言えない。対象者を増やし結果の確認を重ねることは, 今後の課題である。また, 終末期患者の看護実習の特徴をより明確にしていくために, 他領域における実習の学習成果との比較検討も必要と考える。

結 論

終末期患者を受け持った学生の実習記録の一部の「学んだこと・感じたこと」に関する記述内容を分析した結果, 学習成果として 19 カテゴリが形成された。

19 のカテゴリは, 学生が「個別性のある看護の理解」「看護の本質と機能の再考」「人間として看護学生としての自己概念確立への志向」「看護実践能力の修得状況の把握」「看護実践に伴う満足感と困難さの知覚」「終末期看護の専門性の理解」という特徴を持つ学習成果を獲得していることを示した。

文 献

- 1) 菊池和子: 看護学生の死生観 — Purpose-in-Life Test の死生観の分析より —. 日本看護学教育学会, 9: 99, 1999.
- 2) 犬童幹子: 看護学生の死に対する感情・態度及びターミナルケア学習に関する調査. 第 26 回日本看護学会集録 — 看護教育 —, 59-61, 1995.
- 3) 林英代, 藤田泰代, 中島雛子, 川崎純子: 看護学生の死生観に関わる意識変化の要因. 第 26 回日本看護学会集録 — 看護教育 —, 62-65, 1995.
- 4) 奥出有香子, 高谷真由美: 看護学生の実習前後の死に対する意識の変化. 日本看護学教育学会, 10: 151, 2000.
- 5) 時崎泰子: ターミナル期にある患者を受け持った学生への教師の関わりについて. 看護教育, 36: 510-517, 1995.
- 6) 畑中あかね, 林裕美, 勝間みどり: がん患者を受け持つ学生の実習指導(第 3 報). 神戸市看護大学短期大学部紀要, 18: 73-84, 1999.
- 7) 西田直子, 滝下幸栄, 光木幸子: 地域看護実習における訪問看護実習指導による教育効果 — 実習目標の到達度と訪問記録の分析 —. 京都府立医科大学医療技術短期大学部, 8: 9-16, 1998.
- 8) 杉本幸枝, 土井英子, 石本傳江: 基礎看護学一日実習における効果と課題 — 学生の実習記録の内容分析を通して —. 新見女子短期大学紀要, 19: 137-148, 1998.
- 9) 逸見英枝, 上田幸子, 松本幸子, 横川絹恵, 白神佐知子: 成人看護学実習における学生への学習効果 — 実習総括記録内容の分析を通して —. 新見女子短期大学紀要, 19: 159-167, 1998.
- 10) 守田孝恵, 井上奈美: 臨地実習による学習内容の分析 — これからの保健婦が備えるべき「4 つの能力」を中心に —. 第 30 回日本看護学会集録 — 看護教育 —, 133-135, 1995.
- 11) 齋藤久美子, 木立り子, 五十嵐世津子, 小倉能理子, 野戸結花: 見学実習における学生の学びと意義. 弘前大学医療技術短期大学部紀要, 24: 21-31, 2000.
- 12) 藤井洋子, 足立久子, 高田純子, 坂元美智子:

- 成人看護実習 I (慢性期) のグループワークにおける学生の学び. 岐大医短紀要, 6: 15-27, 2000.
- 13) 森田敏子, 足立久子: “終末期看護”の学びへの検討 — レポートの分析より —. 岐大医短紀要, 4: 11-17, 2000.
- 14) 宮越不二子, 伊藤登茂子, 煙山晶子, 遠藤まり子, 山本勝則: 終末期にある患者の看護実習 — 学習者の経験とその意義について —. 秋田大学医短紀要, 6: 87-92, 1998.
- 15) 茶園美香, 宗廣妙子, 山岸直子: ホスピス/緩和ケア病棟実習導入による「終末期患者の看護実習 — 学生の自己評価の分析 —. 慶應義塾大学看護短期大学紀要, 11: 23-31, 2001.
- 16) Berelson. B. (稲葉三千男, 金圭煥訳): 内容分析. 東京, みすず書房, 1957.
- 17) Scott. W. A: Reliability of Content Analysis: The Case of Nominal Scale Coding, Public Opinion Quarterly, 19: 321-325, 1955.
- 18) 世界保健機関編: “教育と研修”. がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア, 武田文和訳, 東京, 金原出版, pp.55-58, 1993.
- 19) 松島たつ子: “緩和ケアについての看護教育”. 看護 QOL BOOKS 緩和ケア, 東原正明, 近藤まゆみ編, 東京, 医学書院, pp.180-188, 2000.
- 20) 杉森みど里: 看護教育学. 東京, 医学書院, 1999.
- 21) Lugton, J. (浅賀薫訳): “ターミナルケアのスタッフに必要なこととは?”. ターミナルケアにおけるコミュニケーション. 東京, 清和書店, pp.15-36, 1997.
- 22) 谷壮吉: “死についての教育”. ターミナルケア医学, 日野原重明監修, 岡安大仁, 柏木哲夫編, 東京, 医学書院, pp.67-72, 1989.
- 23) 木村登紀子: “思春期・青年期の発達”. 発達と教育の心理学, 高嶋正士, 藤田圭一編, 東京, 福村出版, pp.54-68, 1996.
- 24) 高田利武: “自己概念の特質と形成”. 青年心理学概論, 加藤隆勝, 高木秀明編, 東京, 誠信書房, pp.33-49, 1997.
- 25) 杉森みど里: 看護教育学. 東京, 医学書院, 1999.
- 26) 橋本重治: 教育評価基本用語解説. 指導と評価, 7月臨増号, 1983.
- 27) 安孫子忠彦, 自己評価 — 「自己教育論」を超えて —. 東京, 図書文化社, 1987.
- 28) 田島桂子: 看護教育課程と授業展開・看護教育改革の流れを踏まえて. Quality Nursing, 3: 4-12, 1997.
- 29) 梶田叡一: 教育評価. 東京, 放送大学教育振興会, 1995.
- 30) 海野浩美, 舟島なをみ: 看護学実習における学生のケア行動に関する研究. 看護教育学研究, 6: 28-44, 1997.
— 2002. 11. 18. 受稿, 2002. 12. 24. 受理 —

要 約

本研究の目的は、終末期患者を受け持った学生の学習成果を明らかにし、その特徴を考察することである。研究対象者は3年課程短期大学看護学科の3年生であり、成人老人看護実習で終末期患者を受け持った学生11名であった。データは実習記録の一部の「学んだこと・感じたこと」に関する記述内容とした。分析にはベレルソンの内容分析の手法を用いた。その結果、1. ケア提供に伴う困難さの知覚、2. 終末期患者の看護に必要な看護技術の理解、3. 個人や家族の意思・希望を尊重したケア提供の理解、4. 多角的な視点からの患者の理解、5. 終末期患者や死に対する自己の情動反応の知覚など19カテゴリが形成された。これらのカテゴリは、学生が終末期患者を受け持った実習において、「個別性のある看護の理解」「看護の本質と機能の再考」「人間として看護学生としての自己概念確立への志向」「看護実践能力の修得状況の把握」「看護実践に伴う満足感と困難さの知覚」「終末期看護の専門性の理解」という特徴を持つ学習成果を獲得していることを示した。

キーワード: 看護学生, 終末期看護, 看護教育, 臨地実習